

イネアザミウマの 有害動植物リスク分析

平成 24 年 2 月

横浜植物防疫所

第1章 ステージ1：イネアザミウマに関する有害動植物リスク分析の開始

1 - 1 開始：(開始するに至った問題の本質、目的)

イネアザミウマは現在検疫有害動植物として取り扱われているが、検疫有害動植物については、平成16年5月21日に公表された「植物検疫に関する研究会報告書」で「検疫有害動植物については、輸入植物の用途や輸送形態も考慮し、可能な限りリスクの定量的な評価を含めて、適時適切なPRA（有害動植物リスク分析）を実施し、それぞれのリスクに応じた措置となるよう検証し、対応していくことが適当。」とされた。

このため、イネアザミウマの有害動植物リスク分析を見直すこととした。

1 - 2 有害動植物リスク分析地域の特定

日本全域と特定する。

1 - 3 対象となる経路及び潜在的検疫有害動植物

1 - 3 - 1 経路

イネアザミウマが発生する地域から輸入される寄主植物を経路と特定する。

1 - 3 - 2 潜在的検疫有害動植物

イネアザミウマ（学名：*Stenchaetothrips biformis* (Bagnall)）を潜在的検疫有害動植物と特定する。

1 - 4 情報

生物学的な情報は、別紙のとおり。

1 - 5 開始の結論

検疫有害動植物の取り扱いについては、「植物検疫に関する研究会報告書」において、付着する植物の用途や輸送形態を考慮しつつ、随時適切な有害動植物リスク分析を実施する旨の指摘があったことから、有害動植物リスク分析を実施する必要性が生じた。

本種を潜在的検疫有害動植物と特定し、また、本種の発生国の寄主植物を経路と特定し、我が国全域を対象として、植物検疫措置に関する国際基準 No. 11「検疫有害動植物のための有害動植物リスク分析」に基づき、有害動植物リスク分析を開始する。

第2章 ステージ2：有害動植物リスク評価

2 - 1 植物検疫上の取り扱いに影響するイネアザミウマの特性等

2 - 1 - 1 系統

植物検疫上考慮すべき系統に関する情報は見つからなかった。

2 - 1 - 2 未発生有害動植物のベクター

ベクターとなることに関する情報は見つからなかった。

2 - 1 - 3 日本での分布状況及び公的防除の有無

イネアザミウマは、北海道、本州、四国、九州及び沖縄に分布している。

本種は、公的防除の対象ではない。

2 - 1 の結論

イネアザミウマは、北海道、本州、四国、九州及び沖縄に分布し、国内に存在する個体群と国外に存在する個体群の間で寄主植物の被害に差があるとの情報はない。また、本種は公的防除の対象ではなく、その対象とする計画もないため、検疫有害動植物に該当せず、非検疫有害動植物と位置づけられる。よって、有害動植物リスク分析は中止する。

別紙

和名:	イネアザミウマ ^{4), 5), 7), 8)}
学名:	<i>Stenchaetothrips biformis</i> (Bagnall) ^{1), 4), 5), 7), 8)}
英名:	rice thrips、paddy thrips ^{1), 5)}
分類:	アザミウマ目 (Thysanoptera) ^{1), 5), 7), 8)} アザミウマ科 (Thripidae) ^{1), 4), 5), 7), 8)}

分布: (日本) 北海道、本州、四国、九州、沖縄^{1), 3), 4), 7)}
(世界) インド、韓国、タイ、台湾、中国等の等のアジア地域、イギリス、イタリア、オランダ、チェコ、ドイツ、ルーマニア、トリニダード・トバコ、ブラジル、ギニア、ベネズエラ、オーストラリア、パプアニューギニア、グアム^{1), 4), 7), 8)}

寄主植物: イネ等のイネ科植物、コゴメガヤツリ、ハマスゲ^{1), 5), 7), 8)}

形態・生態: 雌成虫は、体長1.2～1.5 mm。淡褐色ないし暗褐色。雄成虫は、体長1.0～1.1 mm。体色は通常雌と同様。ときどき頭胸部と脚は黄褐色、腹部は褐色。越冬は、休閑田、畦畔などのイネ科植物体で成虫又は幼虫態で行う。年間発生回数は、地方によって異なり3～8世代を繰り返す。1雌の総産卵数は40～60卵。^{7), 8)}

被害: 成・幼虫共に葉及び穂を食害する。イネへの加害は本田初期の葉の食害及び出穂期以降の穎内侵入食害であるが、葉の食害は、若い葉に銀白条斑が現れ先端が巻いて枯死するが初期生育が遅れる程度で収量及び品質に影響することは少ない。ただし、穎内侵入食害は、収量及び品質に著しい影響を及ぼす。^{7), 8)}

ベクター

・ 系統: 植物検疫上考慮すべき系統等が存在するとの記述はなく、日本未発生 of 有害動植物のベクターとなる旨の記述もない。^{1), 2)}

防除法: イネ等においてイネアザミウマに対する登録農薬がある。⁶⁾

文献: 1) CAB International (2011) Crop Protection Compendium. CABI (<http://www.cabi.org/cpc/>)
2) CAB International (2011) Plant Protection Database (1972-2011/10). Silver Platter International N. V. (<http://ovidsp.ovid.com/>)
3) 金城政勝・東清二 (1994) 西表島チガヤ草地における昆虫群集構造の季節的変動. 琉球大学農学部学術報告 41: 349-362.
4) 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室 編 (1999) 日本産昆虫目録データベース. 九州大学大学院農学研究院昆虫学教室. (<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/index-j.html>)
5) 日本応用動物昆虫学会 編 (2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版. 日本応用動物昆虫学会、東京: 387pp.
6) 独立行政法人農林水産消費安全技術センター 農薬登録情報検索システム. (<http://www.acis.famic.go.jp/>)
7) 梅谷献二・工藤巖・宮崎昌久 編 (1988) 農作物のアザミウマ 分類から防除まで. 全国農村教育協会、東京: 422pp.
8) 梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典. 全国農村教育協会、東京: 1203pp.